1. 栄養学的研究

部会長
弘前大学医学部
木村　恒

昭和52年度本部門では、前年度の研究成果に基いて、1. 基礎的研究、2. 調査研究、3. 栄養改善の研究を進める一方、現場における実践活動に必要な栄養指導、及び共同研究として食餌基準を加えたので、その概略を項目別に述べる。

1）栄養に関する基礎的研究

国立栄養研究所（山口、田村ら）は、ビタミンE欠乏動物による筋ジストロフィー発現過程について検索を続け、本年はE欠ジストロフィーマウスの溶血試験（CPC法）をおこない、対照マウスに比べて溶血性が高く、そのパターンも異なることを明らかにした。

徳島大学（新山、大中ら）は、患者の基礎代謝（BMR）が重症化に伴って亢進することをつきとめ、その原因を究明するのに血中T_3、T_4を測定して、BMRとの関係を検討したが両者に有意な関係はなかった。さらにN出納について例数を増やし、N出納（Y、mg N/kg/日）を摂取N量（×、mg/kg/日）の間に$Y = 0.39 \times - 78.20$なる有意な関係を導いた。

国立徳島療養所（新居、山上ら）は、患者の栄養所要量を決めるのに、エネルギーのロスを検討する必要を認め、特異動物的作用について調べたが健常者と差は認められなかった。

弘前大（北、木村）は、本症患者に貧血が高率に発生していることに関して、その原因を追求したところ、赤血球浸透圧抵抗が明らかに減弱しており、赤血球の寿命が短かいこと及び鉄欠乏性貧血が多いことを明らかにした。なお患者の脂質代謝を検討し、季節的温度の影響は比較的少なく、季節的食事摂取の影響の方が大きく、肥痩は摂取カロリーの過不足が主な原因であろうと推定した。

2）栄養に関する調査研究

国立療養所下志津病院（鵜沢美智子）は、患者の体重の推移と喫食事の関係を調べ、残食の多いのは、給食時間、嗜好、調理方法に問題があるとし、これらの課題について検討を続けている。

国立徳島療養所（新居、山上ら）は、全国的規模の栄養摂取量調査を同一基準食で実施し、PMD患者の年令別栄養摂取量を算出すると同時に、夏期栄養摂取量の減少、及びVB_1、Caの摂取量の少ないことを指摘した。これらの資料は、患者の食餌基準を決めるのに役立つものと考える。

弘前大（木村）は、D型患者の過去5ケ年間の体重、肺活量、血清たん白質量等の推移を調べ年令16才以上では、体重減少者率が46.2％、肺活量減少者率が87.7％もあり、しかも体重減少と肺活量減少の間には、深い関係のあることを明らかにした。

3）栄養改善に関する研究

国立療養所南九州病院（山口、平田ら）は、おやつの給与時間とその回数による栄養摂取量の差異について検討すると同時に、外泊による体重の変化と栄養摂取量についても観察し、至適栄養量を模索中である。

国立療養所東埼玉病院（大島、小林ら）は、患者の摂取カロリーが少ないことに鑑み、高脂肪食の給与法を工夫し、摂取カロリーを増加させた。

国立療養所西別府病院（浅井、城戸ら）は、重症患者の至適な栄養摂取量及び給与方法について検討を重ねている。

4）栄養指導に関する研究

弘前大（木村）は、本症患者の治療の基調となる栄養管理を強化するために、栄養特性を考慮して、栄養指導上の留意点を中心に述べたパンフレットを作成し、各ＰＭＤ施設に配布し、実践栄養に役立てた。

5）食餌基準に関する研究（共同研究）

ＰＭＤ施設で、経済的、かつ適切な栄養補給ができるように本症の栄養所要量を算定し、これに基づいて食事例も記載した食餌基準を作成するために、共同研究委員会を発足させ、３回の委員会を開き、昭和53年度には、基準書を作成し、各関係機関に配布する予定である。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

昭和52年度本部門では、前年度の研究成果に基いて、1.基礎的研究、2.調査研究、3.栄養改善の研究を進める一方、現場における実践活動に必要な栄養指導、及び共同研究として食餌基準を加えたので、その概略を項目別に述べる。